



第4回

温暖化をくい止めたい

考え方

問一 「家庭の家電製品の増え方」について、年代ごとに示した折れ線グラフを読み取りましょう。

折れ線グラフのたてのじくは、割合を表す「%（パーセント）」という単位で示されています。パーセントで表した割合のことを「百分率」といいます。これは、もとにする量を100としたときの割合の表し方です。



(1) まず、(X)・(Y) をふくむ一文を確認します。

原因は、パソコン、エアコン、テレビ、ビデオデッキなど、エネルギーを食う電化製品が増えたため、(X) や (Y) は一家に2台以上ある計算だ。(6〜9行目)

ここから、(X)・(Y) には、一家に2台以上ある電化製品が入ることがわかります。次に、グラフを見てみましょう。グラフの横のじくは「年代」、

一枚あたりのカロリーが低くても、安心してたくさん食べてしまったら、高カロリーのピザを一枚食べる以上のカロリーをとってしまうことになりですね。筆者はこの話を例にあげて、何を説明したかったのでしょうか。次の部分を見てみましょう。

温暖化問題も同じだ。高いお金をかけて省エネ製品を開発しても、見こみどおりにCO₂が減るとは限らない。(20〜21行目)

「ダイエット・ピザ」の話と温暖化問題には共通点があるのですね。筆者は、省エネ製品を開発しても、「省エネ製品だから」と安心してたくさん使ってしまう、結果としてCO₂の排出量が増えてしまうこともあるということを言いたかったのです。そして、そうした結果を防ぐために、次のように考えています。

その技術を目的どおりに使える仕組みになっていないと、せっかくの技術が生かされないのだ。新技術を開発することも大切だけれど、これからはその技術がもっとうまく使いこなされるような仕組みをつくらないといけない。(21〜25行目)

これらの筆者の考えにあてはまる選択肢はイとウですから、この二つが答えです。

開発にかかるお金についての話題が中心ではありませんから、アはあてはまりません。筆者は「新技術を開発することも大切」と述べているので、エもあてはまりませんね。

問三

②の直前の一文、「こうした取り組みは、もう始まっている」の「こうした取り組み」は、「CO₂の『見える化』」を指します。「こうした」は指示語ですから、これより前の部分から、

たてのじくは、家庭の家電製品の「世帯あたりの保有率」を表しています。この場合、100%であれば、「一世帯に1台」保有しているということになります。製品ごとに見ていくと、テレビとエアコンの保有率が200%をこえており、一家に2台以上あることが読み取れます。したがって、(X)・(Y) には、「テレビ」・「エアコン」が入ります。

(2) パソコンの保有率を示した線を見ていきましょう。パソコンは1985〜1990年の間に登場し、1990年を過ぎたあたりから、少しずつ増え始めています。1995年以降は急激な右上がりのカーブをえがき、どんどん保有率をのばしていることがわかりますね。2005年を過ぎると、保有率は100%をこえました。

つまり、2000〜2005年の間に、パソコンを持つ家庭が急速に増え、その後、一世帯に1台以上保有するようになっていくことを表しています。グラフから読み取れるこれらのことを、自分なりにまとめていければ正解です。

ポイント

資料を読み取る問題では、何についてのグラフなのか、数字は何を表しているのかを最初に確認しましょう。

問二

まず、「ダイエット・ピザ」という話の内容をおさえます。ある会社が、低カロリーのピザを開発したとする。でも、買った人は「カロリーが低いから」と安心してたくさん食べてしまい、むしろ太ってしまうかもしれない。(16〜19行目)

「CO₂の『見える化』」が説明されている部分をさがしましょう。直前の段落を見てみます。

このように、ぼくたちがどれだけCO₂を出したかがぱっと見てわかるようになれば、省エネのしがいもあるし、ダイエット・ピザのような使いすぎを防げるだろう。家電製品を買いかえるときには、『いまよりもっと省エネのものを』と考えるようになるだろう。(41〜45行目)

傍線部分からわかるように、目に見えないCO₂をどれだけ排出したか、目で見てすぐにわかるようにすることを「CO₂の『見える化』」と言っているのです。あてはまるのはアですね。

イ この文章には、「インターネットなどを使って……伝えていく」という記述はありませんから、これはちがいます。

ウ これが「見える化」なのではなく、「見える化」によって、わたしたち自身がより省エネのものを選ぶようになるだろうと筆者は考えていますね。したがって、ウもちがいます。

エ 「排出した量がすぐにわかるようなCO₂を開発すること」ではなく、「CO₂の排出量が一目でわかるような仕組みを作ること」が「見える化」なのです。したがって、エもちがいます。

確かに、CO₂の排出量はつきりわかるようになれば、もっと省エネしなきゃ」という気持ちが生まれるかもしれないね。

